島原地域の火山観光化に向けての観光客・市民の意識調査

長崎大学工学部　学生会員　○井口 敬介　　長崎大学工学部　ﾌｪﾛｰ会員　高橋 和雄
長崎大学工学部　　正会員　中村 聖三

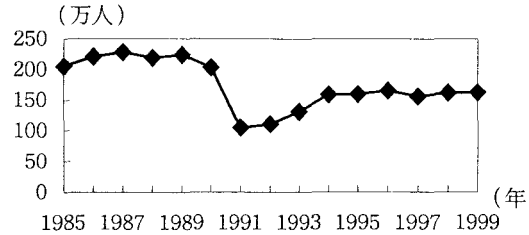
1．まえがき

2000 年 11 月 17 日は雲仙普賢岳の火山噴火から 10 周年目にあたり、これまでの復興状況が各方面から検証された。また、噴火終息から 5 年が経過しており、地域の活性化の主要事業である火山観光化に向けての火山災害遺構の保存、道の駅整備等の火山学習のための整備も目に見える形となっている。しかし、観光客は期待するほど増えているとは言えない状況で、地域の活性化は早急な課題となっている。そこで本論文では、噴火終息後の火山観光化のための施設の整備状況、島原市の入込客数・宿泊者数・島原城入場者数・フェリー・高速船の乗降客数及び道の駅入場者数などから観光客状況の分析を行う。次に、平成 12 年 11 月に島原市内の島原城、深江町内の道の駅及び旧大野木場小学校被災校舎における観光客アンケートをもとに、観光客の動態を明らかにするとともに、火山観光化に向けての課題を分析する。

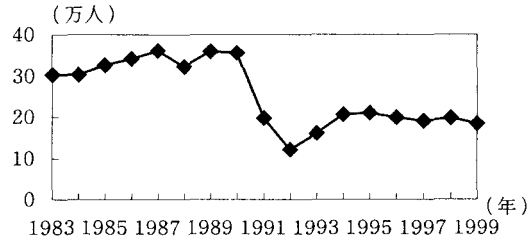
2．噴火終息後の観光客の動向

1995 年の噴火活動の終息後、長崎県は 1996 年度に「島原地域再生行動計画（いわゆるがまだす計画）」を策定して、火山観光化に向けた整備事業を実施してきた。これらによって、観光振興による地域活性化が地域復興の基本戦略となっている。

図－1 は島原市の入込観光客数の推移を示している。1991 年 5 月からの火砕流による人的被害、家屋の焼失及び土石流による家屋の流失被害後、観光客は前年比 50％程度落ち込んだ。1995 年には噴火が終息して、行政は地域一体となって火山観光化に取り組んでいるが、観光客数は災害前の 80％程度のままである。図－2 に島原市の代表的な観光施設である年次別島原城入場者数を示す。従来型の観光施設の観光客は災害前の 50％の水準であり、回復する状況にないといえる。これらの結果から推測すると、入込客数の回復 80％と島原城の回復 50％の差 30％は、旧来の観光施設以外が受け持っているとみなせる。この部分が火山観光の効果であるとするとかなりのウエートを占めているといえる。島原市の年次別宿泊客数を調べると一般客はかなり回復しているが、観光客全体の約 30％を占める修学旅行客（学生）は、災害後 3％程度まで落ち込んだが、現在も 20％以下の水準に留まっている。乗降客のうち、観光客の占める割合が高いとされているフェリー乗降者数は、噴火前を上回っている。熊本や福岡方面からの観光客は元の水準に戻っていると推測される。したがって、長崎・佐世保方面からの観光客が戻っていないと考えられる。



図－1　入込観光客数



図－2　島原場入場者数

3．観光客アンケート調査結果

(1)アンケートの概要

1999 年 11 月に実施した観光客アンケートを補足するために、2000 年 11 月 2，3 日の連休中に道の駅、旧大野木場小学校及び島原城で観光客を対象に、各地点に調査員 2 人による面接方式でアンケートを実施した。回収率は、道の駅 150、旧大野木場小学校被災校舎 62 及び島原城 87 の計 299 である。今回島原城を新たに加えた理由は、島原城を訪れる観光客は従来の観光保養都市のイメージをもっている可能性が高いためである。

(2)観光客の行動パターン

アンケートによれば、島原城や道の駅を訪れた観光客の約40.0％は旧大野木場小学校と道の駅もしくは島原城に立ち寄っている。これに対して、旧大野木場小学校被災校舎の観光客は道の駅及び島原城に立ち寄る割合は小さくそれぞれ 8.0％及び20.7％程度である。また、旧大野木場小学校被災校舎の観光客は島原観光が主目的でないことが特徴として挙げられる。さらに、旅行中の立ち寄り先を聞いたところ表－1の結果が得られた。これによると島原の観光客は雲仙方面の観光とセットになっていることが多い。代表的な観光地である長崎県内のハウステンボスやグラバー邸とセットは 10.0％程度、熊本県の阿蘇（もしくは熊本城）とは4.0％程度である。

表－1　旅行中の立ち寄り先

項　目	道の駅 (N=150)	旧大野木場小学校 (N=62)	島原城 (N=87)	全　体 (N=299)
雲仙仁田峠	89（59.3％）	37（59.7％）	41（47.1％）	167（55.9％）
雲仙温泉街	72（48.0％）	27（43.5％）	39（44.8％）	138（46.2％）
武家屋敷跡	41（27.3％）	16（25.8％）	56（64.4％）	113（37.8％）
ハウステンボス	11（ 7.3％）	5（ 8.1％）	13（14.9％）	29（ 9.7％）
グラバー邸	14（ 9.3％）	9（14.5％）	8（ 9.2％）	31（10.4％）
阿蘇	8（ 5.3％）	2（ 3.2％）	2（ 2.3％）	12（ 4.0％）

表－2　島原の観光のもつイメージ

項　目	道の駅 (N=150)	旧大野木場小学校 (N=62)	島原城 (N=87)	全　体 (N=299)
水と緑が豊かな保養都市	58（38.7％）	29（46.8％）	38（43.7％）	125（41.8％）
火山観光を中心とした交流都市	73（48.7％）	29（46.8％）	23（26.7％）	125（41.8％）
火山防災モデル都市	30（20.0％）	14（22.6％）	5（ 5.7％）	49（16.4％）
歴史文化都市	46（30.7％）	12（19.4％）	23（26.4％）	81（27.1％）
自然、歴史、文化をちりばめられた博物館都市	38（25.3％）	12（19.4％）	18（20.7％）	68（22.7％）
その他	5（ 3.3％）	1（ 1.6％）	11（12.6％）	17（ 5.7％）

自動車で移動した観光客に、「当地での駐車を含めて、スムーズに移動できましたか」と聞いたところ、全体で86.9％が「はい」と回答している。「いいえ」の理由は、交通渋滞と案内標示が不十分となっている。島原城では、「駐車場の位置がわかりずらい」とする回答が多い。

(3)火山観光化についての評価

「島原の観光のもつイメージを2つまで選んで下さい」と聞いた結果を表－2に示す。「水と緑が豊かな保養都市」と「火山観光を中心とした交流都市」が最も多い。しかし、道の駅や旧大野木場小学校において火山や火山災害を身近に見た観光客は火山観光をイメージする割合が島原城の観光客よりもかなり多い。噴火以前（1990年以前）に島原に来たことがある全体の63.5％の観光客に「噴火前と比べて観光の魅力はどうですか」と聞いたところ、「魅力が増大した」と全体の70％が回答している。

1995年5月に火山噴火は停止状態であることが確認されている。「島原を観光するにあたって、不安感があるかどうか」を聞いたところ、どの地点でも「不安はない」が 80％となっている。島原半島では地域の活性化のために、火山を利用する火山観光化を目指した取り組みをしていることを説明した上で、「火山観光化をどう思いますか」と聞いたところ、火山観光化に対して、全体の75.3％が賛成としている。

4．提言

本論文の観光客の現状と火山観光化への観光客の意向を基に次のような提案を行う。

(1)火山を学習体験の場とする災害遺構の保存や施設がある程度整備されているので、修学旅行の回復に重点を置いた情報提供のためのパンフレットやビデオの作成、学校訪問、防災関係者・地域住民の市民を活用した語り部の採用などを積極的に行うべきである。

(2)安全に関する情報、避難体制などの情報などを提供するシステムを作成する必要がある。

(3)観光客の島原と長崎、佐世保とのアクセスや連携をいかに図るかを検討すべきである。